

エジプト発掘 50 年

吉村 作治*

Pioneer Seminar:
Excavating in Egypt for 50 years

Sakuji YOSHIMURA

本稿は 2019 年 12 月 14 日（土）、サンシャインシティ文化会館にて開催された日本西アジア考古学会『パ
イオニアセミナー』の記録をもとに、編集委員会が編集したものです。

『西アジア考古学』21 号編集委員会

はじめに：エジプトの地を踏むまで

僕はもともとエジプト考古学のパイオニアになろう
と思って研究をしてきたわけではありません。好きだ
から今日まで続けてきたのです。僕が小学校 4 年生の
とき『ツタンカーメン王の秘密』という本を読んで、
20 世紀にこのような発見があるのだから、エジプト
では宝がざくざく見つかるのではないかという、砂場
の宝探しのような気持ちでエジプトをやろうと思いま
した。そのことを小学校の担任の先生に話したら、先
生から「そうか。それは考古学と言うんだ。考古学を
やりたいのなら東日本では東京大学、西日本では京都
大学。これ以外はだめだ」と言われました。小学校 4
年生で純真でしたから、どうしたら東京大学に入れる
のですかと聞いたら、東京大学に大勢入っている高校
に行き、その高校に行くにはその高校に大勢入ってい
る中学に行くのだと教えられました。その後 3 年間、
担任の先生と二人三脚で、東京学芸大学の附属中学を
受けようと思って頑張りました。

本当は東京教育大附属の中学校に入りたかったの
ですが、東京大学に入る生徒の数は東京教育大附属の中
学校より私の学校のほうが多かったのが都合が良かった
のです。しかし、それでも東京大学に入ることが
できるとしてしまいました。学校では、エジプトに
行くにはまず身体を鍛えようと思って、サッカーと山
登りを始めました。それからエジプトに行くにはヒッ
チハイクで行こうと思ってルートを調べたら、移動距
離が一番長い国は中国でした。中国語を知らない
とヒッチハイクできないから勉強しました。もちろんア
ラビア語も勉強しましたし、論文を読むために、英語
の次はフランス語も学びました。中学から高校にかけ
ていっぺんに語学を勉強しましたが、全く何も物にな
りませんでした。中国の人と中国語で話をしたけれど
も、何を話していたのかよく分かりませんでした。そ
れでもヒッチハイクで中国を渡ろうと考えていました
から、入学した早稲田大学でも中国語を勉強しまし

た。中国語を勉強している人は皆、毛沢東選集を読む
など頑張っていて、その中で僕は一番できが悪い学生
でした。ある日、中国語の先生になぜ中国語を勉強す
るのかと聞かれました。エジプトに行くためですと答
えたら、エジプトに行くにはアラビア語を学ぶべきだ
といわれたので、ヒッチハイクで中国を通って行くの
で必要なのだと答えました。その当時、中国には簡
単に出入国できないと言われてすっかり落胆し、ヒッ
チハイクで中国を渡る夢は棄てました。

飛行機でエジプトに渡ろうと思いましたが、学生が
飛行機に乗るのは 100 年早いと門前払いされました。
そこで船での移動を考えました。いろいろな会社に掛
け合いましたが、まともに取り合ってもらえませんでした。
最後に行った会社で、受付の女性が早とちりを
して、社長に電話をかけ、僕たちを通してしてくれまし
た。僕たちをみて社長は驚いたと思いますが、エジプ
トに行くために会社のタンカーにただで乗せてもらい
たいとお願いにきたこと、日本にはエジプトで発掘し
ている研究者が誰もいないこと、そして将来、日本に
エジプト考古学研究所を作りたいことを社長に話しま
した。すると、社長の了解が得られ、タンカーに乗せ
てもらえることになりました。

2 週間かけてタンカーでインド洋を航行し、そのあ
とヒッチハイクしてレバノンのバイルートまで行っ
て、そこからまた船に乗ってアレクサンドリアまで行
き、汽車に乗ってカイロに着きました。全行程で約一
月半くらいかかりました。

最初のゼネラル・サーベイ

ようやく着いたカイロで、地元の人とアラビア語で
話をしたら、僕の発音が悪くてぜんぜん通じません
でした。たくさんの人が集まってきてしまって困ってい
るところに、少し日本語の会話ができるカイロ大学の
学生が僕たちを助けてくれました。学生は僕たちを日
本航空のオフィスに連れて行ってくれました。そこに

早稲田大学の卒業生がいて、遺跡を訪ねに来たことや、エジプトで発掘したいという夢を、鳩料理を食べながら話しました。すると、その人が手を貸してくれることになり、7ヶ月かけてエジプトをジープで巡見することができました（図1）。そのときに、ダハシュール（Dahshur）にある赤のピラミッド、メンノンの巨像、ルクソール（Luxor）のセティ1世の葬祭殿を訪れました。

ゼネラル・サーベイはトヨタ社から借りたランドクルーザーで行いました。無料で貸してくれるということで、1年後に返しに行きましたら、中古の車は返さなくてよいと言われました。無料で譲ってもらえることになったので、東京まで乗って帰り、すぐに売ってしまいました。ゼネラル・サーベイの報告書をつくるお金が必要だったのです。この車はもう廃車になっているでしょうけど、これに乗って、エジプト全土を2回巡りました。車のドアのところに日本の国旗がかいてありました。エジプトで日本の国旗が使えるのは大使だけだと言って怒られましたけど、僕を民間大使だと思って下さいと言って、消さないで済みました。どこへ行ってもこの旗があるから安心だと思っていたら、エジプトでは日本の国旗はあまり知られていなかったのです。なかには、日本は中国の一部だと思っている人もいました。

ゼネラル・サーベイが終わって、帰りのタンカーに乗って帰国しました。日本の領海に入ったときに、僕ら5人は船長の部屋に集まりました。帰ったらエジプト考古学研究会を作る、日本にエジプト考古学の礎を作ろう、早稲田に講座を作って、研究所を作ろうと話しました。帰国して解散し、皆1回田舎に帰り、1週間後に戻ってきて、ふたたびメンバーが集まりました。しかしその時は、4人ともうなだれていました。その理由を聞くと、皆の口からエジプト考古学を続けることはできないと言われてしまいました。



図1 ゼネラル・サーベイ

魚の丘遺跡彩色階段の発見

川村喜一先生は僕よりも12歳、年が上でした。先生がまだご存命のころ、2人でエジプト考古学を続ける決意をしました。そうしないと、2人が趣味で始めたばかりで、後世に何も残らないではないかという危惧を抱いたからです。それで1971年に初めて現地で発掘を始めることになりました。実はそのまえに、1966年にエジプトに行き、1967年に一度帰国してから、1968年にカイロ大学に留学することになりました。そこで遺跡を発掘する権利を得る交渉に着手しました。当初はなるべくよい遺跡を掘りたかったのですが、横やりが入り、うまくいきませんでした。

結局、ルクソールの西岸、王家の谷などの中心部から外れたマルカタ（Malkata）という遺跡の発掘権を得ることができました。そこで科研費の支給も得て1971年から遺跡を発掘しました。しかし、いくら掘っても何も出てきませんでした。当時初めて発掘をするときに、3年やって成果があがらない場合は、科研費を新たに得ることはできないと思っていました。調査計画最終年度の1974年1月15日、川村先生と2人で覚悟を決めて、少しばかり残っていた日本酒で乾杯してから、現場に向かいました。そこに当時人夫頭をしていた男がやってきて、「旦那、来年はいつ来ますか？」と尋ねきたので、「何も出ないところに3年もいても仕方がないから、もう来ないだろう」と答えました。すると、さきほどの男が、「出るところにご案内します」と口にし始めたので、嘘か本当かわからず、とりあえずあとをついて行きました。

つれられて行った先にあった大丘と小丘のあいだを発掘することにしました（図2）。すると、階段の踏面に絵が描いてあるのを見つけました。最初、これは帆船かと思いました。わからないので、ドイツ隊のディーター・アーノルドさん（Dieter Arnold）に声をかけましたら、「おめでとう」と言われました。何がおめでたいのか判然としなかったので、その理由を



図2 魚の丘遺跡の彩色階段遺構

尋ねました。すると、この遺構は新王国時代のアメンヘテプ3世の、おそらく3回目の王位更新祭の建物だと思うとのことでした。

すごい発見をしたというので、急いでカイロに帰ってきて、日本の大手新聞社の記者にそのことを伝えました。けれども、彼らは取材に来てくれませんでした。その理由を尋ねますと、「そういう取材に使える飛行機賃や取材費は高くつくから難しい」と言われてしまいました。ルクソールに戻る飛行機の中で僕がうなだれていたら、隣に座っていた人がその訳を尋ねてきました。僕がその理由を答えると、その人が代わりに遺跡に来ると言い始めました。見ず知らずの人にそう言われても困ると思っていたら、アソシエーション・プレス (Association Press) と書かれた名刺を渡されました。そのときは気がつかなかったのですが、アソシエーション・プレスというのは、APのことだったのです。最初から AP と言われていれば、わかったと思います。

その記者は僕たちが発見した遺跡に来てくれました。遺跡を見て、素晴らしいと言ってくれました。僕は説明できなかったのですが、代わりにドイツのアーノルドさんに説明してもらいました。アーノルドさんは、かのハワード・カーターが、「素晴らしいものを発見した。急いでお出で請う」という電報をルクソールの郵便局から打ったと教えてくれました。僕はカーターの本を読んで、エジプトに行こうと思っていましたから、そのことはよく知っていました。とにかく電報を打ってくれと頼むと、APの本社がツタンカーメン以来の大発見という形で取り上げてくれました。そうしましたら、カイロにいた特派員が来たのです。日本の大手新聞にも電話して、ツタンカーメン以来の大発見ということで、川村先生は一躍時の人になりました。ツタンカーメン以来の大発見とまではならないと思ったのですが、そのように伝えられました。

ところが川村先生は余りにも有名になりすぎて、そのせいでいろいろと苦労することも増えました。川村先生はついに癌になって亡くなってしまいました。悲しかったですが、先生のおかげで、今ここに僕がいるのです。

いずれにいたしましても、この発見のおかげで、アメリカ隊やイギリス隊、ドイツ隊が僕たちの成果を認めてくれました。最終的には10年間、魚の丘遺跡を発掘しました。

クルナ村貴族墓の調査

そのあと、アメンヘテプ3世時代の高官、貴族や大臣などの墓を見つけました。そして、魚の丘の建物に描かれている装飾図案を復原しようと考えました。それで魚の丘遺跡を復原して、観光客に来てもらおうと

思いました。比較調査でクルナ村 (Qurna) の貴族墓、すなわちアメンヘテプ3世の家臣の墓を調査しました。全部で15くらいの墓を発掘し、その中で一番すごかった第318号墓を見つけました。

この墓はすでに70年くらい前に一度発見されていましたが、その後、どこにあるのかもわからなくなっていました。それを探していたら、200体の人骨とミイラとそれからミイラの破片が見つかりました。長崎大学の内藤芳篤先生と聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎先生に、形質人類学的な分析をお願いしました。ここで見つかったミイラを日本に運んできて、聖マリアンナ医科大学にあるCTスキャンなどで分析をしました。

そのときの考古庁長官のアハマド・カドリー博士 (Dr. Ahmed Kadry) が、せっかくマルカタの魚の丘遺跡を見つけたのだから、アメンヘテプ3世の王宮を調査したらどうかと、勧めてくれました。そこで早稲田大学理工学部にも所属していた渡辺保忠先生の指揮のもとで、王宮址の調査を行いました。そうしましたら、彩画片が出土しました。日本工業大学教授の西本真一先生が復原図を描きました。それは国際エジプト学会で評価されまして、華々しく取り上げられました。

ピラミッド調査

1987年、フランスの2人の建築家がギザ (Giza) のクフ王のピラミッド内部にある王の間は墓ではなく、ピラミッドの中に他に墓があると発表しました。それでマイクログラビティメーターで探すことになりました。彼らが墓を見つけたと言っても結果として出てくるのは数字ばかりだから、よくわかりませんでした。そのため、賛否両論になって、シンポジウムなどで喧々囂々の議論になりました。そのとき、もっとわかりやすいハイテクの機器があるというので、GPR (Ground Penetrating Radar: 地中レーダー) と EM (Electro Magnetic) 法を使ってピラミッドを探查することになりました。

このときからすごくお金がかかるようになりました。GPRで、ピラミッド内の壁の向こうに何があるかを調べました。それと同時にスフィンクスの周りでも同様の調査を実施しました。その結果、女王の間では壁の向こうに通路を、スフィンクスの脇の下で部屋を見つけましたが、壊してはいけないというので、まだ発掘調査はしていません。

話はとびますが、つい先だって、名古屋大学がミュオンという宇宙線を観測することで、ピラミッドの中に空間があると発表しました。この成果をもとに、NHKが特番を制作し、その中で「ピラミッドの中に小型飛行機が入るくらいの空間がある」と主張しました。そしてその空間には何か副葬品があるのでは

ないかという内容で放送されました。僕が、ピラミッドは王墓ではないと言っていたら、僕の意見を重用してくれて、ピラミッドの中を調査することができました。そこで GPR を使って、ピラミッドの中や周りでクフ王の墓を見つけようと思って調査しましたが、さらに検証を進めるために、九州大学の金政浩先生と組んで、ミュオン検出器を造って、調査を計画しています。結構お金がかかりましたが、機器は 2019 年 12 月にカイロに着き、通関手続きをしています。それで 2020 年の 3 月にピラミッド内部を探索するつもりです。

僕たちはミュオン検出器を使って調査をします。GPR とドローンも併用して分析データを集めます。新しい調査によって、名古屋大学隊と同じような結果が出れば、彼らの解釈を支持することになります。違う結果がでれば、ピラミッドは王墓ではないという証拠が得られます。実は一部の高校の教科書には、ピラミッドが王墓であると書いてあるのですが、そういう説を改める必要がでてくると信じています。3 年か 4 年かけて、ピラミッドが王墓ではないということを証明したいと思います。

アブ・シール南丘陵遺跡調査

話を戻しますと、ピラミッドのなかで見つけた部屋について論争しているうちに、外国隊がピラミッドで調査を続けることが難しくなっていました。当時の考古庁から GPR で別の遺跡を探索するようと言われたので、1991 年からアブ・シール南丘陵遺跡 (Abusir South) で調査を開始しました。すると、GPR に引っかかるものがありました。それはカエムワセトというラムセス 2 世の第 4 王子で、現代風にいえば総理大臣のような立場の人の葬祭殿でした (図 3)。ここからステラ (石碑) などいろいろなものが発見されました。その内容が良好であったため、この遺跡もよく知られるようになりました。



図 3 アブ・シール南丘陵遺跡のカエムワセトの石造建造物

この葬祭殿が作られた時、エジプトは新王国時代でした。その頃の下エジプトではトゥーム・チャペル (Tomb Chapel) といって、墓の上に神殿を造って一体となった儀礼用施設が普及していました。ですからこの神殿の下にも墓があると予測して、施設の周辺も含めて、地中レーダーなどの調査をしたけれども、よい結果は得られませんでした。

アブ・シール南丘陵遺跡の南側斜面を調べていくうちに、石積み遺構を見つけました。これは階段ピラミッドの石積みと全く同じ築造技術であると建築の専門家から指摘されました。ここで階段ピラミッドを組み立てる訓練をしてから、階段ピラミッドを造ったのだらうというふうに考えられています。

石積み遺構の背後の斜面からは岩窟遺構が見つかりました。岩窟遺構の中から、足下にクフ王の名前のあるライオンの女神像が出土しました。これはクフ王の時代のものでなくて、そのあとの中王国時代にクフ王を信仰する慣習ができて、そのときいろいろな彫像を作り、家に飾って拝んだり、崇拜したりしていたことの印なのです。そうした遺物を見つけて、いよいよクフ王の墓がピラミッドの他にあることを確信しました。

ダハシュール北遺跡の調査

そうこうしている間に東海大学の坂田俊文先生から、人工衛星の画像解析をして遺跡を見つける方法を教えてもらいました。僕もその方法を採用しました。ソ連が崩壊したあとにロシアの人工衛星が撮影した衛星写真が高価な値段で売られていました。ダハシュール周辺の写真を購入し、東海大学情報技術センターで解析し、遺跡を何カ所か見つけましたが、他の国の調査隊が調査権を持っていることがわかりました。しかし、ダハシュールの北だけ調査権がとられていなかったため、そこを発掘することにしました。

ダハシュール北遺跡 (Dahshur North) では、イパイ (Ipay) のトゥーム・チャペルを見つけた (図 4)。さらにそこを掘りすすめていくと、下からメス (Mes) の石棺を見つけた。イパイのトゥーム・チャペルは新王国時代第 18 王朝のもので、メスの石棺はラムセス朝のもので、メスとはモーゼの意味です。モーゼはヘブライ語で、古代エジプト語ではメスというのです。この下をさらに発掘したのですが、残念ながら盗掘されていて何もありませんでした。

未盗掘墓の発見

人工衛星の画像解析によって見つけた残りの候補地については、まだ公表していません。随分とお金をかけましたので、生きているあいだに順番に調査をして



図4 イパイのトゥーム・チャペル

いこうと思いましたが、ダハシュール北遺跡では二十数年間調査しています。そこで4つの未盗掘墳墓を見つけました。全部で400基ほどあるうちの100基くらい掘っています。4%というすごい確率で未盗掘墳墓を見つけたことになります。ここではセヌウ、セベクハト、ウイアイ、チャイの棺を見つけました。ウイアイのものは新王国時代、チャイは親子の棺で、これも新王国時代のものだと思います。

王家の谷・アメンヘテプ3世王墓の調査

アメンヘテプ3世の王墓を調査することも中断してはいけないというので、まずクリーニングをしました。観光客を入れて、見学できるようにしようとエジプト政府から依頼があったのです。王墓の入口部分を発掘し、ファウンデーション・デポジット (Foundation Deposit) を見つけました。王墓の中には10面ぐらい、壁画があります。これをクリーニングして修復する作業にとりかかりました。しかし、その費用は大変なもので、またお金を集めて続きをしようと思っています。

第2の太陽の船プロジェクト

「第2の太陽の船」は1987年にGPRの調査で見つけました。1993年に穴を掘って、そこからファイバースコープを入れて、木片をサンプリングし、木の種類や年代を調べました。C14年代測定の結果、4500±100年前という数値が出ました。木片を分析しますと、樹種はレバノン杉であることがわかりました。つまり、太陽の船はレバノン杉で造られたのです。レバノン杉は当時レバノンから輸入されていました。材木を手に入れるために、古代のエジプトがレバノンに売っていたのはパピルスでした。

さて、2011年に、4550年ぶりに太陽の船がおさめられていた竪坑の石（船坑蓋石）をはずす作業をしました。大変でした。静岡県石工職人に手伝ってもら

い、最後の4枚だけ残して蓋石を全部取りました。当初、船の部材は全部で2000点くらい残っていましたが、取り上げたために今はもうほとんどなくなって、あと100点くらい残っている状態です。2020年の3月にその作業を終える予定です。

ここでも莫大な経費がかかりましたが、独立行政法人国際協力機構（JICA）の協力を得て、これから船を復原するためにいよいよ組み立てを始めます。そのためのデータを、東京大学の協力をえて収集しました。そのデータからコンピュータで復原図を作って、それを元に造ろうと思っています。大エジプト博物館（The Grand Egyptian Museum）が2020年10月に開館する予定です。それに合わせて、別の建物を建て、そこで「第2の太陽の船」の組み立てをしようと思っています。

予定では、2021年の4月頃から始める計画です。一年間はコンピュータ復原の作業を東京大学と一緒に進めます。また、レプリカも作りたいと思っています。古代船のレプリカを作って、花火の時、隅田川に浮かべてみたいです。

今後の調査計画：

ギザ台地西部墓地と大ピラミッド探査

先ほども話したように、ピラミッドは王墓ではないと私は思っています。ピラミッドのスキャンニングをして、2020年の暮れにはピラミッド内部に王墓の空間はないということを明らかにしたいです。もちろん、実際、どうなるかはわかりませんが。

その調査の後、2021年からギザ台地の西部墓地を調査しようと思っています。調査を予定しているのは、ピラミッドの設計・施工・監督をしていたヘムオン（Hemon）のマスタバです。この周辺は全部マスタバであるにも関わらず、一部だけ平地で何も上に建物がない場所があります。この下に、おそらく秦の始皇帝の墓と同程度の規模をもつクフ王の墓があるだろうと、私は予想しています。

最後になりますが、大ピラミッドで、GPRをつかって試験的な探査をしました（図5）。また、高解像度カメラでの撮影や、ドローンをつかったの撮影でも良い成果がでました。

おわりに

小学生のときにエジプトの考古学を志して、今日までやってきました。今では30人くらいの直弟子に囲まれながら研究を続けていますが、彼らも自分で勝手に研究をしています。この50年間で僕はそれなりに自分で稼いで、寄付をもらい、国からの援助も得て調査をしてきました。そのおかげで立派な弟子たちができてくれました。そのなかに僕の意思を継いでくれ



図5 大ピラミッドでの試験的調査

る者がいるかもしれませんが、それが誰になるのか、僕は関知しないようにしています。

僕は早稲田大学を60歳で辞めました。2011年に大震災がおきたとき、僕は失業中でした。そこで、石巻からはじめて、いわきまで講演してまわりました。2011年に始めたときは誰も僕の話聞いてくれませ

んでした。2年目には10人くらい話を聞いてくれるようになり、3年目には100人、4年目には300人と集まるようになりました。こうして岩手県、宮城県、青森県では僕の話聞きに、ひいきにしてくれる人がどんどん増えてきました。

早稲田大学にいたころ、僕はテレビによく出ていました。テレビに出ること自体はどうでもいいのですが、テレビに出ると有名になります。有名になると講演の依頼がきます。そのおかげで、調査のための資金を集めることができるようになりました。また、皆さんが僕のことを知るようになってくれましたから、交渉の時にも役に立ちます。そういう理由でテレビ出演をしています。別に有名になりたいくてしていた訳ではないのです。僕の弟子たちは控えめで、僕がテレビに出ることをいやがります。2019年11月3日にエジプトから文化功労賞の様なものをもらいました。日本ではまだもらったことがありません。有名だからといって批判しないようにして下さい。

以上です。ありがとうございました。